

かずさの博物誌

エリマキシギ

～色彩変化が大きな旅鳥～

文・写真／成田篤彦

2014.8.20

八年前の夏、一キロ先まで干潟が広がっていたが、野鳥の姿は見えなかった。だが、望遠鏡で覗いていた人が、河口付近にエリマキシギがいると言った。今までこのシギには出会っていない。是非見たいと思った。

望遠鏡で見せてもらうと、三羽のキョウジョシギと一羽のトウネンが流れ着いたアオサの間にくちばしを入れ、何かをついばんでいた。その手前に、キョウジョシギより二回り大きいシギがいた。それが、「エリマキシギだ」と教えてくれた。くちばしが短く、尖っていて、下にわずかに曲がっている。脚は長く灰色で黄色を帯びていた。強風で羽毛が乱れていた。羽毛は黒く、縁が明るい茶色。京風の



©成田篤彦

▲干潟でえさを捕るエリマキシギ＝2006年8月6日 木更津市

れた。アオアシシギと共に飛び立ったシギがいた。背は赤茶色。くちばしが黒、少し下向き。首がやや鮮やかな赤茶色、首から胸に黒い斑点がある。アオアシシギより小さい。意外に派手な色だ。こんな鳥は見たことが無かった。専門家に聞くとエリマキシギだと言う。大きさから見て、夏羽の雄だと思った。

このシギは襟巻状の飾り羽や背面や胸の羽色にも変化が多い種で、素人のバードウォッチャーを惑わせる。かつて、学生の頃、生物の分類には「色を根拠にはいけない」と言われたのを思い出した。



©成田篤彦

▲湿地から飛び上がるエリマキシギ(左)とアオアシシギ(右)
＝2013年4月15日 木更津市

粋な着物を着ているように見えた。だが、エリマキシギというからには襟巻に似た飾り羽があるのだと思っていたが、それはなかった。撮るには遠い。背を低くし、這うようにして近づいた。

強烈な暑さで、干潟の表面がゆらゆらとゆがんで見える。彼らは夢中でえさをついばんでいた。腐り始めたアオサに発生するトビムシのような甲殻類を食べているのだと思う。写真から、夏羽が一部残っている冬羽の雄のエリマキシギだと思った。

さて、一昨年の春、ヨシの新しい葉がはじめていた頃、湿地を訪



©成田篤彦

▲干潟を飛ぶエリマキシギ＝2013年9月30日 木更津市

ところで、昨年の九月にはこのシギが二羽、盤洲干潟の水際を一直線に飛んでいた。シルエットで、色彩は分からなかったが、大きさと姿やくちばしの形から見て、すぐにエリマキシギだと分かった。一度、実物で種名が分かると次に出会ったときには確実に分かるようになる。そうなるのかえってつまらなくなるもので、人の気持ちとは複雑なものだ。

memo

エリマキシギ

チドリ目シギ科

全長雄三十二センチ、雌二十五センチ。ユーラシア北部の沿岸から内陸部まで、広い範囲で繁殖する。淡水湿地を好み、海岸や河口の干潟などにも生息する。昆虫やミミズ類、植物の種子などを食べる。春の繁殖期には雄に派手なえりまき状の飾り羽があるが、日本ではほとんど見られない。冬は黒と灰色の地味な色をしている。上総では四〜五月と八〜十月にかけて、少数、八又田や盤洲干潟を訪れる。

参考文献

日本動物大百科第3巻 鳥類Ⅰ
1996 平凡社